

新 潮 文 庫

天 の 夕 顔

中 河 与 一 著



新 潮 社

顔の夕天



定価 60 円

新潮文庫

昭和二十九年五月三十一日 発行
昭和四十一年六月三十日 二十九刷改版
昭和四十三年九月十五日 三十二刷

著 者 中 河 与

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁 落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

天の夕顔

中河与一著

新潮社版

天
の
夕
顔

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天^{あま}くだり来むものならなくに

和泉^{いずみ}式部^{しきぶ}

第一章

信じがたいと思われるでしょう。信じるということが現代人にとっていかに困難なことかということは、わたくしもよく知っています。それでいて最も信じがたいようなことを、最も熱烈に信じているという、この狂熱に近い話を、どうぞ判断していただきたいのです。

わたくしは一つの夢に生涯を賭けました。わたくしの生れて来たことの意味は、だから言ってみれば、その儚^{はな}げな、しかし切なる願いを、どこまで貫き、どこまで持ちつづけたかということになるのです。ばかばかしいといって、人は、おそらく身体^{からだ}をふるわしてわたくしの徒勞を笑うかもしれません。それが現代です。しかしわたくしにとって、それは何事でもあり得ないので、わたくしは現代に生きて、最も堪えがたい孤独の道を歩いているように思われます。

わたくしが初めてその人に逢^あったのは、わたくしがまだ京都の大学に通っていたころで、そのころ、わたくしはあの人の姿を、それも後ろ姿などを時々見てはまた見失っていたのです。格別美しい人とも思わなかったのですが、どんな関係の人か、わたくしのいた素人下宿^{どうと}の、部屋の向うなどで、見えているかと思うと、またいつか見えなくなっているのです。

間もなく、その人がそのうちの娘であり、今は結婚して誰かの夫人になっているのだというこ

とを知らうになりました。

ある朝、彼女はわたくしの部屋へ挨拶に来ると、自分の夫が今、外国に行っていることや、間もなく自分はたった一人の母を失うかも知れんというようなことを話して帰りました。何か訴えるような悲しいものがあつたのを覚えています。

その人の母親、つまり下宿の女主人が入院していることは知っていましたが、そんなに悪いということをわたくしは知らずにおりました。

そのうちにその人が死なれ、あの人は黒い喪服をつけて、泣きながら母親の葬列に従っているのです。すべてが何か不思議に思われる、異様な状態で、短い間につきつぎに起つたように思われました。

その前のお通夜の夜は、わたくしも一緒にお通夜をしましたが、その夜、あの人の一人の子供が、夜がふけてから座布団の上に頭をつけたまま眠ってしまつて、それを見つけたあの人の叔母が、もう一枚、上からボンと座布団を、小さい身体の上にかぶせたので、本当の饅頭のようになつた子供が、ひとしおあわれにみえたのを覚えています。

四十九日の観音講にも来てほしいというのでわたくしは出かけてゆきました。しかしわたくしなどにそんな集りのしっくり感じられるはずはなく、わたくしは間もなく帰つたのですが、すると、あとから供え菓子とどけられ、儀式めいた手紙ながら、あの人の文章で、わたくしが他人さびず、母親の入院当時見舞に行つたことや、何くれと昨日今日手伝つたことに對する札などが、

達筆でしたためてあるのです。

そのころのわたくしは、もうそこから下宿を変って、神楽ヶ丘の近くの知人のうちに移っていたのですが、どういうわけか、わたくしにはその通り一ぺんに見える手紙がうれしくてたまらなかったのです。自分のしたことに単純な善行があったからかもしれない。しかし実は、そういうことほど恐ろしい悪魔を、いつも背後にひそませやすいものはないということを、あとで考えるようになりました。

わたくしはすぐ返事を書きました。あの人の悲しい気持などをいろいろと想像して。

すると、また手紙が来て、それには、生前、母がいつもあなたを讃めていた。母の思い出をつなぎに、そちらへ参ったら、またお目にかかりましょうと書いてありました。

しかしわたくしたちは逢わなかったのです。わたくしは友達などと、時に頹廢を口にするほど、実は頹廢を拒否する強情さを持っている青年だったのです。そのうち、何かをきっかけに、郵便で、わたくしはあの人から本を借りたことがありました。何しろわたくしは、天体物理の学生で、そのせいか、趣味として女性のしたしんでいる文学ほど、そのころのわたくしにとって、ふかぶかと美しく思われるものはありませんでした。

それは翻訳の「アンナ・カレーニナ」で、読みすすんでゆくうちに、わたくしは丁度アンナが雪国の汽車からおりて来て、ウーロンスキーと不幸な、しかしこの世で最も喜びに溢れた逢い方をするあたりで、小さい一枚の名刺を見つけたのです。

それは名刺とはいえない、ほんの紙切れといった方がいいかもしれませんが、普通の名刺を半分に分けたくらいに細いものに、見るともなく見ると、細い字で、「いつも逢いたいと思うばかりに」と書いてあったのです。

格別、わたくしに宛てたものであるはずはないのですが、わたくしはそれを幾度も幾度も眺めなおしました。

ところが、次に借りた「ボバリ―夫人」にも、そんな栞が入っていて、それには、

わすれじの行末までは難ければ今日を限りの命ともがな――

という高内侍の歌が書いてありました。

彼女が誰かに宛てたものか、誰かが彼女に宛てたものか、それとも彼女がわたくしに宛てたものかと考えあぐんだ末、少なくとも、それが自分に宛てたものでないことだけは、確かだと考えたのです。それは一切の誰に宛てたものでもなかったと考えるのが一等似つかわしく、そればかりか、誰ともわからぬが、むしろそこはかたない心を書きつけたものと考えると、ひとしおにその優しさが身にしみるのでした。そしてわたくしもまた、その紙切れのうしろに、誰に宛てるともなく、何か書いてみたいとさえ考えるのでした。

そんな状態のまま、わたくしは何かクサクサする別のことがあって、しばらくあの人にも手紙

をださずにおりました。

すると、あの人から手紙が来て、それには何かお互いの間にわだかまりがあるのではないかしら、もしそうだったら打ちあけてほしい。二人の間に、どんな障害でも心にあるのはたえられないと書いてあるのです。

わたくしはその手紙の意味をどう解釈すればいいのか了解に苦しみました。それで、それはどういう意味か知らしてほしいと、折り返して問いあわせの手紙をだしたのです。すると、そんならそちらへ行くことがあるから、その時お目にかかってお話ししましょう、と返事がしたためてありました。

丁度六月の末で、石榴の赤い小さい花が、葉の中に見え、わたくしは試験の用意に忙しいころでした。王禅寺からの帰りみちだといって、あの人が立ち寄ってくれました。王禅寺はあの人がかつて参禅したところであり、また母親のお骨を最近納めたところでもあったのです。

折りあしくわたくしは夕食の時間で、そのことを言うと、彼女は何か落着かぬらしく、それでもその間の待つ間にもと、わたくしから本を借りようとしたのです。わたくしは何を出したものと、何か心ひけながら、幼い文学の本を出したのを覚えています。

わたくしが食事をすましてゆくと、彼女は嬉しそうに立ちあがり、もう一度挨拶をしながら座布団に坐りました。しかしその時の彼女の顔は何か真っ青で、わたくしにはそれが不可解に感じられました。

「お顔が真っ青ですね」

すると、あの人はそれを説明するように、しばらくして言ったのです。

「わたくし、ルビーの石を落しましたもんですから。帰りみちで」

「惜しいことをしましたね」

「でも、なんでもないんですけれど、そのことは」

それから土産みやげだといって、桜ん坊の籠かごを出し、話をしながら、まきかえし、くりかえし、ハンカチをもみもみしていました。そしてその日、彼女が話してくれたことは、自分の結婚は不幸ではなかったが、主人が洋行に出発した翌日、荷物を片づけていて、ふと日記を見ると、そこには主人が他の女を愛していたことが書いてあり、今もその女に追跡せられているために、その苦しみから逃げようとして外国に行こうとしているのだ、ということがわかったというようなことでした。

言ってみれば、それは自分への愛情とも思われるのに、それから長い間、あの人はその事実に悩んでいたというのでした。外国へ言ってやっても、そのことについてだけは、ふれることが苦痛なのか、何の返事もくれないし、そうかといって何のしようもなかったが、今はやはり主人を愛そうと決心し、子供もあることであるし、どんなに夫が外国から長く帰って来ないでも待つていようと心にきめていたということです。

そんな時、丁度わたくしと逢ったのですが、弟のようなわたくしと交際することは、何か姉弟

の親しさのように、この上なく幸福であったが、もし自分が、あなたを愛しだしているのではないか、と考えると、そのことに危険を感じだしたというのでした。

「それで、わたくしは」

あの人は力を入れていうのでした。

「今はいいけれど、この上交際をつづけていると、わたくし、自分の立場が苦しくなりそうに思われて来ましたの。だから今日は、お別れにまいりましたの」

「何ですって」

わたくしは意外の結論に言葉がつまると、それでも率直に自分の心を言いました。

「僕は恋愛の気持はなかったつもりですが」

「でも」

「僕は友情と考えて来ました、だから今のままで決して危険はないと思いますが」

わたくしは彼女が、今日は別れに来たという最後の言葉に、少なからず狼狽ろうばいしてつづけました。

「でも、わたくしはもう決心して参りました」

「……………」

「……………」

「そんなら僕たちは、もう、これっきりだとおっしゃるんですか」

「そう考えて参りましたの」

卓を隔てて端坐している彼女には、何か威厳のようなものが現われ、堅い決意を述べるその強さに圧倒されて、わたくしは、もう何も言うべき術も知りませんでした。

これが、わたくしが、彼女と逢って、彼女から突き離された最初でありました。

しかし、そのために、わたくしは今に至る二十幾年、あの人のことを思いつづける運命を持つようになったのです。わたくしたちは生涯をかけました。これは、どうお話しすればよいのか。わたくしは、あの人を思う思いに、今もたえがたい命を生きているのです。

その日はもう暗く、わたくしたちは初めて、一緒に肩をならべて歩きました。

ついぞ逢うこともなくて、こんな気持になっているのが不思議に思われました。もっともわたくし自身は冷静のつもりだったのですが。

それにしても、こんなに優れた人と結婚していても、他の女を愛するという男の心理を思つて、わたくしは、それが考えの及ばない気がしました。その時あの人にはふとわたくしに言いました。

「お背が高くていらっしゃいますのね」

何でもない言葉ですが、その中には、この一刻が、最初で最後であろうと、思いつめているあの人の激しい悲しみが溢れていたと、あとになって、わたくしには幾度も思われるのでした。

ふとみると、彼女も、女としては高い方であったが、それでもわたくしの肩の下あたりにあの人の髪が見えました。

熊野神社前まで歩いてゆくと、丁度電車が来て、あの人は前から乗りました。

動くまでじっと、わたくしは見ていました。燃えるような眼で、あの人もわたくしを見ていました。やがて電車が動くと同時に、深いお辞儀をし、間もなく電車が角を回ると、彼女は見えなくなっていました。

その翌朝、わたくしは封緘^{ふうかん}ハガキの手紙をあの人から受取りました。

その中には――

わたくしはボンヤリしていたので電車に乗ったまま七条の駅から島原の方までつれてゆかれました。駅にたどりついて鏡に映った自分の顔を見た時は、真っ青で、自分ながら今にも倒れはしないかと思われるほどでした。神戸のうちへ帰りましたら夜ふけの十一時。でもこのことだけは申上げまいと思っていましたけれど、ああ、今は、もう全部申上げてしまいます。本当にわたくしはいつの間にか、熱情をそいであなたをお愛し申上げておりました。二十八の今日まで、あなたのような方にわたくしは、一度もお逢いしたことがありませんでした。どうぞこんなことを申上げるのをお許し下さいませ。わたくしは初め、あなたに歩調の乱れを見たら、すぐにも戒めようと、いつも考えておりました。それなのに、先にわたくしの方がだめになってしまいました。そればかりか、今となって、不自然な愛情というものを平生^{へいぜい}から笑っていた自分の単純さが恥じられてなりません。わたくしは母を失い夫を失い、今は友情をも失ったよ

うに思います。でもそれはどうにもならなかったことでございます。わたくしがあの時、本をお借りしたのは、自分の心臓の激しさを隠すためでございます。またわたくしが青ざめていたのも、決してルビーのためなどではなく、最後のお別れを言おうとする決心が、わたくしをあんなに悲しませていたのでございます。でもわたくしはもう最後のお別れをいたしました。だからと思って何もかにも書いてしまいました。わたくしはどんなに自分に打ち勝とうと思ったでございます。わたくしはいつか自分が冷静な心をとるもどし、どこまでも美しい友情に終始して、あなた様を傷つけず、またわたくし自身も最初からの強い決心を貫いて、妻として母として生きぬこうと、どんなに考えたかも知れません。しかしみな力が及びませんでした。それは今後のことはわからず、いつかいいお友達になれる日がないとも限りません。でも今、わたくしの内心の声は、電撃のように否と強く否定しております。それでわたくしは、もうお目にかかるまいと、悲しい今度の決心をいたしましたのでございます。

この涙に咽びながら書いたような手紙をよんで、わたくしはすぐ返事を書きました。それには——あなたは僕のことをまだ少しも知ってられないのです。よくよく近よって見てもらえば、きっとその心配も一掃せられるでしょう。僕はむしろそれを願っています。——と書きました。しかしあの人からは、それっきりもう手紙も何も来なくなっていました。だからそれは決して愛の回り道ではなく、その決意の堅固さが既に感じられ、わたくしはそれを思うと、かえっ

て急にあの人を追っかける心理に強く襲われるようになりました。

八月下旬の夕ぐれ近く、わたくしは、じっとしていられなくなると、あの人を神戸の端の熊内^{くまうち}に訪ねてゆきました。あの人ほど燃えていなかったわたくしが、あの人にはもの足りなかったのではないかと、今はそんなことも考えられるのでした。

傾斜の多い神戸の街をすぎて、布引^{ぬのびき}の山の弓なりに彎曲^{わんきよく}しているあたり、丁度その中に抱きこまれていような高みのところに出、それからガラス張りの洋風の家などのならんでいるあたりで、わたくしは、やっとあの人の子供のうちの門札を見つけたのです。

するといつかの、あの人の子供が走って来たのです。

「廉ちゃん」

わたくしが覚えていて呼ぶと、

「ああ」

そして子供が、「お母ちゃん、人が来ているよ」と言ったかと思うと、家の中から格子をあけたのが、あの人だったのです。華美^{はで}な浴衣^{ゆかた}があだっぽく、それでいて、いつか見た喪服の幻影が、その影につきまとしてみえました。

二階に通されました。大阪の方の町の灯がチラチラと海の向うに見えました。それをあの人が指さして説明してくれました。それは賑やか^{にぎやか}にみえて、はかなく、人間のいとなみというものを、大きい自然の暗黒の中で寂しげにまたたかせていました。